

# 現代朝鮮語の受動文において動作の主体がどのように明示されるか

崔昌玉  
松山大学

## 1. 本稿の目的

本稿の目的は、現代朝鮮語の受動文<sup>1)</sup>においてその動作の主体が明示される場合、それがどのような格助詞を伴うかを考察し、先行研究の記述を再検証するところにある。

ところで、Foley & Van Valin (1984)でも言及しているが、動作の主体(actor)、主語(subject)そして主題(topic)は、言語学において全く異なる意味で使用されている<sup>2)</sup>。本稿では、現代朝鮮語の受動を規定する上でそれらを区別することが重要な意味を持つと考え、まず、それらを整理することにする。

また、Jespersen (1924)の研究以降、受動を規定する折、動作の主体はそれほど重要視されてこなかった。なぜならば、受動文において動作の主体が明示されることはそれほど多くないからである。本稿は動作の主体が受動文において明示される場合にも焦点を当てることで、現代朝鮮語の受動の規定をより明確化しようとするものである。

本稿は次の点から構成される。それは、(1)先行研究では、動作の主体、主語、主題をどのように規定してきたか、(2)現代朝鮮語のヴォイスはどのような方法で表現されるか、(3)先行研究では、現代朝鮮語の受動文における動作の主体を標示する格助詞としてどのようなものを提示しているか、(4)本稿での具体的な検証、(5)今後の課題を提示する。

## 2. 動作の主体、主語、主題

本稿では、現代朝鮮語の例を通じて、動作の主体、主語、主題を確認する。また、ここでは、それらを確認するために、서정수(1996)の記述を参考している。

まずは、서정수(1996:1053)の例文を以下に示すことにする<sup>3)</sup>。

(1)a. 개가 닭을 쫓는다. (犬が鶏を追う。)【能動文】

b. 닭이 개에게 쫓긴다. (鶏が犬に追われる。)【受動文】

서정수(1996:1057-1058)では、そこでの考察を通じて、3つの条件を全て備える受動文を‘진피동문(真の受動文)’と呼んでいる。その3つの条件とは、次のものである。以下、本稿では、術語を統一して、それら条件を説明することにする。

最初のもは無標形 ‘쫓다(追う)’ と有標形 ‘쫓기다(追われる)’ という対立をなす形態論的条件である<sup>4)</sup>。また, 서정수(1996:1057-1058)では, 形態論的には ‘-이-, -히-, -리-, -기-’ という接尾辞による動詞の派生だけを考察対象にして, この ‘진피동문(真の受動文)’ を規定する<sup>5)</sup>。

次のものは能動文には必ず対応する受動文があるという統辞論的条件である。そこでは, 能動文で主語である ‘개(犬)’ が格助詞 ‘가(が)’ を伴っているのに対して, 受動文ではそれが主語や目的語以外に降格し, 格助詞 ‘에게(に)’ を伴うこと, あるいは能動文で目的語である ‘닭(鶏)’ が格助詞 ‘을(を)’ を伴っているのに対して, 受動文ではそれが主語に昇格し, 格助詞 ‘이(が)’ を伴うことも考察対象になる。

最後のものは能動文であろうが, 受動文であろうが, 動作の主体である犬が動作の客体である鶏を追うという言語外事実が変わらないという意味論的条件である。そこでは, 動作の主体や動作の客体という意味論的役割が考察の対象になる<sup>6)</sup>。

以上の概観を通じて, 動作の主体や動作の客体は意味論的な観点から規定されるものであり, 主語や目的語は統辞論的な観点から規定されるものであることがわかる。

ところで, 本稿では, 意味論的な役割として動作主や受動者を使用せず, 動作の主体や動作の客体をそれらの代わりに使用する。というのも, 動作主や受動者というと, それらの名称から推測して, 動作主であれば, 何らかの意図を持って, 動作を成し遂げる, つまり動作主は生き物であるということが一方的に付与されたり, 受動者であれば, 誰かに何らかの害を被る生き物あるいは物体ということが一方的に付与されたり, するからである。

本稿では, 一旦, 動作の主体を能動, 受動において動作を遂行するもの, 動作の客体を能動, 受動において動作を被るものとして規定して, 議論を進める。

先にも言及したことであるが, 動作の主体と主語そして主題は異なる。ここからは, 서정수(1996)において主題がどのように規定されているを概観することにする<sup>7)</sup>。

서정수(1996:176-177)では, 主題は本来, 談話(discourse)分析で導入された概念であり, 現代朝鮮語では, (1)主題は文の最初に現れ, かつその文で主題とされるものは ‘는/은(は)’ を伴うことが多い, (2)主題は限定性(definitiveness)を備えた名詞句であって, “로/으로 말한다면(で言うのであれば)” などと言い換えて, 解釈され得るのが一般的であり, (3)主題は説明または議論の対象であるのが常であるのに対して, 中心は比較的単純な叙述対象であるという特徴を提示している。以下の例は서정수(1996:177)において提示されたものである。

(2)a. 이 사람이 정치가이다. (この人が政治家だ。)

b. 그 사람은 똑똑한 정치가이다. (その人は賢い政治家だ。)



- (3)a. 내가 김씨를 믿는다. (私が金さんを信じる。)  
 b. 김씨는 내가 믿는다. (金さんは私が信じる。)

서정수(1996:176-177)の概観を通じて、主題とは統辞論的、意味論的観点から規定されるものではなく、談話分析の観点から規定されるものであるということがわかる。

本稿では、現代朝鮮語の主題の研究は、助詞‘가/이(が)’を‘는/은(は)’に取り替えたり、談話の一部を考察したりする議論に止まるものではなく、旧情報や新情報<sup>8)</sup>あるいはFSP<sup>9)</sup>も関与する議論であると考え。しかしながら、本稿では、それらについて具体的に取り扱うことはせず、動作の主体、主語、主題が全く異なるものであるという点だけに言及して、議論を先に進める。

### 3. 現代朝鮮語のヴォイスと受動文における動作の主体の明示

菅野裕臣(1982:280-283)では、現代朝鮮語において動詞をヴォイス的に派生する形態論的な方法として以下の3つを提示している(以下に提示する内容は菅野裕臣(1982:280-283)と菅野裕臣他編(1991<sup>2</sup>:1044)の内容を本稿が整理したものである)。

- [1]接尾辞…基本語幹<sup>10)</sup>にヴォイス接尾辞‘-이-, -히-, -리-, -기-’等をつける方法  
 [2]疑似接尾辞<sup>11)</sup>…基本は‘-하다’であり、使役を表す場合は‘-하다’の代わりに‘-시키다’を、受動を表す場合は‘-하다’の代わりに‘-되다’, ‘-받다’, ‘-당하다’をつける方法  
 [3]分析的な方法<sup>12)</sup>… i)第I語基+‘계 하다/계끔 하다’あるいは‘계 만들다/계끔 만들다’, ii)第III語基+‘지다’という方法<sup>13)</sup>

ヴォイス接尾辞‘-이-, -히-, -리-, -기-’について言及するならば、菅野裕臣他編(1991<sup>2</sup>)の記述では、(1)その接尾辞を取り得る動詞が限定的であり<sup>14)</sup>、(2)その接尾辞を伴う動詞は他動詞だけではなく、自動詞もあり、その派生形は受動を表すだけではなく、自動、他動、使役を表すこともあるとしている<sup>15)</sup>。ここでは、その例として‘앉다(座る)’【自動詞】と‘앉히다(座らせる)’【使役形】、‘쫓다(追う)’【他動詞】と‘쫓기다(追われる)’【受身形】を提示する<sup>16)</sup>。

ところで、菅野裕臣他編(1991<sup>2</sup>:1033)では、現代朝鮮語の受身形を規定する過程で、動作の主体がどのように明示されるかについても言及している。それを提示すると、受身形とは、自動詞のうち動作の主体が‘에게’, ‘에게서’, ‘로부터/으로부터’, ‘에 의하여’等で表し得るもの、可能の意味を表し得るものであるということである。

現代朝鮮語の受動文において、その動作の主体がどのように明示されるかについては、菅野裕臣他編(1991<sup>2</sup>:1033)だけでなく、서정수(1996:1072-1075), 우인혜(1997:123-133), 김흥수(1998:625-641), 남수경(2011:159-181)などでも言及しているが、本稿では、その中でも菅野裕臣他編(1991<sup>2</sup>:1033)の規定に従うことにする。というのも、その他の研究では、様々な意味論的役割を使うことで、本稿では動作の主体と見做し得ないものも含めて、考察しているからである。以下に例を示し、それを確認することにしよう。

(4) 반군 단체인 레나모는 남아프리카 공화국의 정보 기관에 의해 만들어진 것으로, 1977 년부터 좌익 정권에 대한 기습 공격을 벌이고 있다. (反軍団体であるレナモは南アフリカ共和国の情報機関によって作られたものとして, 1977年から左翼政権に対する奇襲攻撃を繰り広げている。)민【『조선일보, 종합(91)』, 조선일보사, 1991】

(5) 첫 방영분은 프로축구 일화구단의 박종환감독과 가수 조영남 등 평소 정의원과 친하게 지내는 지인들과 함께 하는 [이주일 스페셜]로 만들어진다. (初回放送分はプロサッカーであるイルファクラブのパク・チョンファン監督と歌手チョ・ヨンナムなど日頃からチョン委員と親しくしている知人たちと一緒に過ごす「二週間スペシャル」として作られる。)민【『중앙일보 96-03 매체』, 중앙일보사, 1996】

‘만들어지다(作られる)’は分析的な形である第Ⅲ語基+‘지다’により, ‘만들다(作る)’が他動から受動に派生しているものである。先に提示した(4)も(5)も受動文であるが, (4)は動作の主体が団体名詞<sup>17)</sup>であり, 明示されているものの, (5)は動作の主体が明示されていない。本稿では, (5)の動作の主体をテレビ番組制作者と見做す。

서정수(1996)でも, 남수경(2011)でも, 現代朝鮮語の受動文において動作の主体が格助詞‘로/으로’でも標示されると言及してきた。しかしながら, 本稿の規定では, 動作の主体は何らかの動作を遂行するものである。(5)の‘이주일 스페셜(二週間スペシャル)’は文脈上, 作るという動作を遂行していると思做すことはできないので, ここでは, これを動作の主体ではないと判断するということである。

本稿の考察対象は次のものである。形態論的には, 先に提示したヴォイス接尾辞, 疑似接尾辞, 分析的な形により, 動詞が受動に派生したものすべてが考察対象である。また, 統辞論的には, 対応する能動文が存在するかどうかには関わらず<sup>18)</sup>, 受動文において動作の主体が伴う格助詞が考察対象である。更に, 意味論的には, 受動文において何らかの動作の遂行が確認できなければ, それを動作の主体とは認めることはしない。



## 4. 本稿での考察

### 4.1. 受動文においては動作の主体が明示されるのか

本稿では、実際の考察に入る前に、能動文に比べて、受動文がいかに出現しにくいのか、そして受動文において動作の主体がいかに出現しにくいのかを確認することにする。

まずは、実際の用例において受動文の出現率が能動文のそれよりも低いことから言及する。最初に現代日本語や現代英語の状況から確認してみよう。ここでは、実際の用例において能動文が受動文よりもその出現率が高い。例えば、Shibatani(1988:95)では、収集した日本語の508の例文のうち、その82%が能動文であるのに対し、その18%が受動文であると報告している。また、ここでは新聞や科学文書の受動文の割合が25%から32%であるのに対し、小説や随筆の受動文の割合が5%から7%であるとも報告している。一方、Shibatani(1988:95-96)では、Svartvik(1966:46)の報告を引用しながら、英語の科学文書において68%が能動文、32%が受動文であり、英語の小説において73%から95%までが能動文、5%から7%までが受動文であるとしている。

同様に、崔昌玉(2007)を概観しても、現代朝鮮語のヴォイス接尾辞による受動文の出現が少なく、実際の用例として受動文を収集することが難しいことがうかがえる。また、本稿の調査を通じて、민족문화연구원 용례검색기(民族文化研究院 用例検索機)において、例えば‘파괴하다(破壊する)’は全体928例のうち、559例(60.2%)を占めるのに対して、‘파괴되다(破壊される)’は全体928例のうち、369例(39.8%)を占めることが判明している<sup>19)</sup>。

一方、남수경(2011:150)では、参考資料として세종 균형말뭉치(世宗均衡コーパス)の考察結果を提示する。ここでは、(インタビュー、対談などのより格式がある資料が多い)quasi1というコーパスにおいてヴォイス接尾辞による受動文603例のうち、動作の主体が出現したのは69例しかないのに対して、(ドラマの台本など日常生活と似通った資料が多い)quasi2というコーパスにおいてもヴォイス接尾辞による受動文785例のうち、動作の主体が出現したのは38例しかないことを指摘している<sup>19)</sup>。

これも本稿の調査を通じて確認すると、민족문화연구원 용례검색기において‘파괴되다(破壊される)’を含む受動文は369例であるが、そのうち動作の主体が明示されている受動文は124例(33.6%)である。

疑似接尾辞による受動文を部分的に考察したものではあるが、本稿の考察から現代朝鮮語においても能動文より受動文が少なく出現し、受動文における動作の主体もそれほど頻繁には明示されないことが再確認できる。

### 4.2. 受動文における動作の主体の明示

ここでは、現代朝鮮語の受動文において動作の主体がどのような格助詞を伴うかを、実際の用例の考察に基づき考察し、先行研究の記述を再検証すること

にする。

#### 4. 2. 1. 受動文において動作の主体が ‘에게/한테(に)’ を伴うとされている場合

菅野裕臣他編(1991<sup>2</sup>:1033)では、動作の主体が ‘에게(に)’ で明示されることを受身形の規定にしている。本稿でも、受動文において動作の主体が ‘한테(に)’ を伴う場合も考察対象とする。

以下の例は全て受動文であるが、動作の主体が ‘에게/한테(に)’ を伴い、明示されているものである。

(6) 연설을 마치고 나올 때 고르비는 다시 1 천여 시민에게 둘러싸여 큰 봉변을 당했다. (演説を終え、出てくる時、ゴルバチョフはまた 1000 人余りの市民に囲まれ、かなりの罵声を浴びせられた。)민【『조선일보 칼럼(90)』, 조선일보사, 1990】

(7) 80 년대 청소년들에게 인기가 높았던 스포츠시계가 최근에는 보다 화려한 모양과 색상으로 여성들에게 애용되고 있다. (80 年代, 青少年たちに人気が高かったスポーツタイプの時計が最近はより華麗な形と色合いで女性たちに愛用されている。)민【『조선일보 생활(93)』, 조선일보사, 1993】

(8) 그리고 그것은 하나의 사건이 되어 이튿날 전 사장한테까지 전해졌다. (そして、それは一つの事件になり, 2 日前, 社長にまで伝えられた。)민【송하춘, 『하백의 딸들』, 문학과 지성사, 1994】

先の例文(6)-(8)のように、その動作を成し遂げる主体は人あるいはそれと同等の生き物である。本稿では、動作の主体は必ず人あるいはそれと同等の生き物という前提で以下の議論を進めることにする。

また、格助詞 ‘계(に)’ は菅野裕臣他編(1991<sup>2</sup>:120)において尊敬すべき名詞につくことが指摘されているが、以下の例のように、受動文において動作の主体がその格助詞を伴っている。

(9) 문화재 감정 받으러 오는 분들도 모두 그분께 안내됐다. (文化財の鑑定を受けに来る方々も全てその方に案内された。)민【『동아일보 2003 년 기사: 문화』, 동아일보사, 2003】

一方、菅野裕臣他編(1991<sup>2</sup>)の記述によれば、‘더러(に)’ や ‘를/을 보고(に)’ も ‘에게/한테(に)’ と同じく、与格<sup>21)</sup>であるが、本稿の調査から、これらは ‘에게/한테(に)’ とは異なり、受動文に現れることはなく、以下の例のように、命令文に現れることが判明している。



(10) 형님도 참, 진작에 나더러 부르라고 해야죠. (兄さんも本当に、前もって私に呼べと言わなくちゃ。)민【이승우, 『사람들은 자기 집에 무엇이 있는지도 모른다』, 문학과지성사, 2001】

(11) “그럼 나보고 어찌란 말이냐?” (“じゃ、私にどうしろっていうの?”)민【박은아, 『창조적인 글쓰기』, 새길, 1994】

4. 2. 2. 受動文において動作の主体が‘에게서/한테서(から)’を伴うとされている場合

菅野裕臣他編(1991<sup>2</sup>:1033)では、動作の主体が‘에게서(から)’で明示されることを受身形の規定にしている。本稿では、受動文において動作の主体が‘에게서/한테서(から)’を伴う場合も考察対象とする。

以下の例は受動文であるが、動作の主体が‘에게서/한테서(から)’を伴い、明示されているものである。

(12) 그리하여 나는 억울하게도 옥 선생에게서 쫓겨났다. (そうして私は無念にもオク先生から追い出された。)민【김성희, 『33 세의 광세』, 문학사상사, 2002】

(13) 나는 태어난 날 아비 어미에게서 버림받았어요. (私は生まれた日, 親父お袋から捨てられました。)민【최인석, 『구렁이들의 집』, 문학과지성사, 2001】

(14) 이 문제에 관한 가장 진지한 논의는 불교사회교육원의 유정길 사무국장에게서 발견된다. (この問題に関する, 最も真摯な論議は 仏教社会教育院のユ・ジョンギル事務局長から発見される。)민【김광식, 『인간을 위하여 미래를 위하여』, 도서출판 열린세상, 1995】

(15) ‘삼포 가는 길’에서도 그와 유사한 행위가 서로 대조적인 인물한테서 이뤄진다. (‘산포行く道’でも, それと似通った行為が互いに対照的な人物から作り上げられる。)민【송하춘, 『발견으로서의 소설기법』, 고려대학교 출판부, 2002】

4. 2. 3. 受動文において動作の主体が‘에(に)’を伴うとされている場合

ここでは、受動文において動作の主体が‘에(に)’を伴う場合を考察する。趙義成(1996:20)では、現代朝鮮語の格助詞‘에(に)’の機能と意味を単語結合論<sup>22)</sup>の観点から考察し、記述する過程で、現代朝鮮語の受動文において動作の主体が格助詞‘에(に)’を伴うことにも言及している。本稿では、趙義成(1996:20)の見解を参考にしつつ、その考察を試みる。以下に例を提示することにしよう。

(16) 어느덧 중년이 된 나는 나의 삶을 명확하게 그려내야 할 것 같은

생각에 쫓긴다. (いつの間にか中年になった私は私の人生を明確に描きださなければならないような考えに追われる。)민【『좋은생각 1999년 1월호』, 좋은생각, 1999】

(17) 오른손은 아주 두껍고 눈같이 흰 석고 붕대에 싸여 있었다. (右手はとても厚く, 雪のように白い石膏の包帯に覆われていた。)민【이윤기, 『그리운 흔적』, 문학사상사, 2000】

(18) 사람들은 자신도 모르는 사이에 카메라에 찍히고 있습니다. (人々は自分も知らない間にカメラに撮られています。)민【『동아일보 2003년 기사: 문화』, 동아일보사, 2003】

例文(16)-(18)は格助詞‘에(に)’を伴っているものが人を介在して, 動いているという点で動作の主体のように, 意味論的に解釈することができる。しかしながら, 本稿では, これらはいくまでも考えや道具なので, 受動文における動作の主体と見做すことはしない。

また, 以下の例文は動作の主体そのものが明示されていない。以下の例文は受動文を表すものではなく, 現代朝鮮語のアスペクト形式‘Ⅲ 있다’<sup>23)</sup>を伴い, 状態相<sup>24)</sup>を表している。

(19) 절은 울울창창한 송림에 둘러싸여 있다. (寺は鬱蒼とした松林に覆われている。)민【박일문, 『살아남은자의 슬픔』, 민음사, 1992】

また, 以下の例でも動作の主体が明示されていない。

(20) 6·25 전쟁의 혼란 틈에 각 집안의 구석구석에서 흘러나온 책들은 헌책방에 언제나 수북이 쌓여 있었다. (朝鮮戦争の混乱のはずみで各家庭の隅々から流出した本は古本屋にいつもうず高く積まれていた。)민【『동아일보 2003년 기사: 문화』, 동아일보사, 2003】

本稿の考察では, 現代朝鮮語の受動文において動作の主体が格助詞‘에(に)’で表すことができないということになる。

#### 4. 2. 4. 受動文において動作の主体가 ‘에서(で)’를 伴うとされている場合

以下, 受動文において動作의 主体가 ‘에서(で)’를 伴う場合를 考察することにする。趙義成(1994:63-64)では, 現代朝鮮語의 ‘에서(で)’의 機能と意味를 單語結合論의 観点から記述し, 今後の課題として興味深い指摘をしている。それは格助詞 ‘에서(で)’가 現代朝鮮語의 ヴォイスにも関与し, その動作의 主体를 標示することもあるというものである。しかしながら, そこで言及しているのは, 能動文における動作의 主体가 ‘에서(で)’表示される場合である。



また, 남수경(2011:174-175)でも, 現代朝鮮語の受動文において動作の主体が‘에서(で)’を伴うことをすでに言及している。

ここでは, それらの指摘や言及を具体的に検証したいと考える。以下に例を提示する。

(21) 그래서 그런지 영국에서는 이 영화의 상영이 아직도 금지되고 있다. (だからなのかイギリスではこの映画の上映がいまだに禁止されている。)민

【『한겨레신문, 칼럼(92)』, 한겨레신문사, 1992】

(22) 임진왜란이 있기 조금 전에 중국에서는 {산법통종}이라는 산법서가 간행되었다. (文禄・慶長の役がある少し前, 中国では『算法統宗』という算法書が刊行された。)민 【김용운, 『일본인과 한국인의 의식구조』, 한길사, 1985】

例文(21)と例文(22)を考察すると, ‘영국(イギリス)’と‘중국(中国)’は, 複数の人から成立する団体名詞<sup>24)</sup>であるという点も鑑みて, 動作の主体と見做すこともできる。しかしながら, 本稿では, それらは映画を禁止したり, 本の刊行をしたりする場所とも解釈することができることから, 動作の主体と見做すことはしない。

#### 4. 2. 5. 受動文において動作の主体が‘로/으로(で)’を伴うとされている場合

現代朝鮮語の受動文を考察した先行研究, 例えば남수경(2011:170-174)でも, 受動文において動作の主体が‘로/으로(で)’で明示されると指摘したものが数多い。しかしながら, 本稿の規定によれば, 以下の例において‘로/으로(で)’を伴っているものは動作の主体ではないことになる。

(23) 그리고 입과 눈은 테이프로 막혀 있었다. (そして口と目はテープでふさがれていた。)민 【『조선일보 칼럼(90)』, 조선일보사, 1990】

(24) 전라북도의 대곡창 지대를 관개해온 벽골제는 삼국 시대의 것이었는데, 고려 인종(1146) 때 왕의 병을 고치기 위해 무당의 지시로 파괴되었다. (全羅北道の大穀倉地帯を灌漑してきたピョクコルチェは三国時代のものだったが, 高麗の仁宗(1146)の時, 王の病を治すため, シャーマンの指示で破壊された。)민 【김용운, 『일본인과 한국인의 의식구조』, 한길사, 1985】

例(23)と例(24)は動作の主体ではなく, 道具と原因である。本稿では, それらを動作の主体として見做すことはしない。一方, 次のものはどうであろうか。

(25) 수출품 생산 원가는 원료비-노임-금리 비용의 세 가지 비용으로 구성된다. (輸出品の生産原価は原料費-賃金-金利費用の 3 種類の費用から構成される。)민 【『조선일보 칼럼(90)』, 조선일보사, 1990】

例(25)では, ‘비용(費用)’が格助詞‘로’を伴っているが, 本稿では, これを動作の主体とは見做さない。陳満里子(1996)では, 単語結合論の観点から現代朝鮮語の格助詞‘로/으로(で)’を考察し, その機能と意味を記述しているが, 例文(25)の‘비용(費用)’は陳満里子(1996:12-13)で言及するところの材料に該当する。これは本稿で規定する動作の主体とは異なるものである。

更に, 以下の例文での‘금(森)’はそれ自身が根をはったりして, 動くことができるという点で動作の主体として解釈することもできるだろうが, 本稿では, 動作の主体とは判断しない。この文自体も受動文ではなく, アスペクト形式‘Ⅲ 있다’を伴い, 状態相を表している。

(26) 산은 온통 울창한 숲으로 덮여 있다. (山は全て鬱蒼とした森で覆われている。)민 【유재현, 『유재현의 역사 문화기행 : 메콩의 슬픈 그림자. 인도차이나』, ㈜창비, 2003】

このように, 現代朝鮮語の受動文において格助詞‘로/으로(で)’を伴うものであっても, 動作の主体と見做すことができないということになる。

#### 4. 2. 6. 受動文において動作の主体が‘로부터/으로부터(から)’を伴うとされている場合

菅野裕臣他編(1991<sup>2</sup>:307-308)では, ‘로부터/으로부터(から)’を(1)場所を表す名詞に付いたり(‘에서’や‘에서부터’などと置きかえ得る), (2)時間を表す名詞に付いたり(‘부터’と置きかえ得る), (3)人間を表す名詞に付いたり(‘에게서/한테서’と置きかえ得る)すると記述している。また, 先に提示したように, そこでは受身形を規定する折に, その動作の主体が‘로부터/으로부터(から)’も伴うことにも言及している。남수경(2011:174-175)でも, 動作の主体が‘로부터/으로부터(から)’によって標示されるとしている。以下に例文を提示する。

(27) 정의원은 89 년 미국 뉴저지주에서 (...中略...) 보증인으로 세운 문구호씨(전 프로축구 퓨마팀코치)로부터 최근 사기혐의로 피소됐다. (チヨン委員は89年, アメリカのニュージャージー州で保証人としてたてた문구호氏(前プロサッカーチームのプーマのコーチ)から最近, 詐欺容疑で訴えられた。)민 【『한국일보 96-02 사회』, 한국일보사, 1996】

(28) 이로 인해 미국 정부는 방여지 등 해외에 망명해 있는 중국의 인권



운동가들로부터 비난을 받고 있다.(これによって, アメリカ政府はパン・ヨジ等の海外に亡命している中国の人権運動家たちから非難をされている。)민【『조선일보 사설(91)』, 조선일보사, 1991】

しかしながら, 以下の例文では, ‘로부터’ を伴う名詞があるが, 本稿では, 単に水素の構成物であって, これを動作の主体として見做すことはしない。

(29)이 때 수소로부터 헬륨이 만들어졌다.(この時, 水素からヘリウムが作られた。)민【『조선일보 과학(93)』, 조선일보사, 1993】

このように, 現代朝鮮語の受動文において格助詞 ‘로부터/으로부터(から)’ を伴うものであっても, 動作の主体と見做すことができないものもあるということになる。

4.2.7. 受動文において動作の主体が ‘에 의하여/에 의해서(によって)’ を伴うとされている場合

菅野裕臣他編(1991<sup>2</sup>:1033)でも, 남수경(2011:167-170)でも, ‘에 의하여/에 의해서(によって)’ が受動文の動作の主体を表すと言及している。以下に例を示す。

(30)북한의 경제 정책과 경제 잠재력에 문제가 적지 않다는 지적이 소련 경제 전문가들에 의해 제기되었다.(北朝鮮の経済政策と経済潜在力に問題が少なくないという指摘が旧ソ連の複数の経済専門家によって提起された。)민【『조선일보 경제(90)』, 조선일보사, 1990】

しかしながら, 本稿では, 以下の例における ‘에 의하여/에 의해서(によって)’ を伴うものはその動作の主体と見做すことはしない。

(31)직원 1 백 50 여명은 옥상으로 대피했다가 고가사다리차 등에 의해 구조됐다.(職員 150 名余りは屋上に待避した後, はしご車などによって救助された。)민【『한국일보 96-02 사회』, 한국일보사, 1996】

(32)즉 소설을 쓰는 사람의 개성에 의해 스타일이 만들어지기 때문이다。(すなわち小説を書く人の個性によって, スタイルが作られるからだ。)

민【전상국, 『소설 창작 강의』, ㈜문학사상, 2004】

이정택(2004:17-35)や남수경(2011:167-170)では, 受動文の動作の主体が ‘에 의하여/에 의해서(によって)’ を伴う場合, その受動文は話しことばというよ

りは書きことばで使用されることが多いなどの特徴を列挙しているが、ここでは、それらの指摘の考察に深く立ち入ることはせず, ‘에 의하여/에 의해서(によって)’ が受動文の動作の主体を標示するために使用されるという言及に止めておく。

また, 本稿の調査の結果, 受動文において ‘를 통하여/을 통하여/통해서(を通じて)’ も動作の主体を標示するために使用されていることがわかった。

(33) 중국을 위시한 동남아 각국에서는 물론, 멀리는 미주와 유럽에서까지 한국인 관광객들의 끌블견은 현지의 매스컴이나 주민들을 통해서 국내에 전달되고 있다. (中国を始めとする東南アジア各国ではもちろん, 遠くはアメリカとヨーロッパまで韓国人観光客のぶざまな行動は現地のマスコミや住民を通じて国内に伝えられている。)민【『조선일보 사설(91)』, 조선일보사, 1991】

しかしながら, 本稿の考察では, 以下の例における ‘로/으로 인하여/인해(に因って)’ は動作の主体を標示していないということになる。

(34) 우리 나라는 그 동안 지나친 산업 발달로 인하여 환경이 많이 파괴되었다. (我が国はこの間, 行き過ぎた産業発達によって環境が大きく破壊された。)민【박은아, 『창조적인 글쓰기』, 새길, 1994】

これら ‘에 의하여/에 의해서(によって)’, ‘로/으로 인하여/인해(に因って)’, ‘를 통하여/을 통하여/통해서(を通じて)’ の使用がどのような点で類似し, 異なるかについては, 稿を改めて, 言及することにしたい。

#### 4. 2. 8. 受動文において動作の主体が明示されないとされる場合

Jespersen(1928)の研究以降, 受動文において動作の主体が明示されないことが多いことは先行研究においてよく言及されることである。例えば, 現代朝鮮語の受動文においても以下のように動作の主体が明示されないことがある(例文(5)は再録である)。

(5) 첫 방영분은 프로축구 일화구단의 박종환감독과 가수 조영남 등 평소 정의원과 친하게 지내는 지인들과 함께 하는 [이주일 스페셜]로 만들어진다. (初回放送分はプロサッカーであるイルファクラブのパク・チョンファン監督と歌手チョ・ヨンナムなど日頃からチョン委員と親しくしている知人たちと一緒に過ごす[二週間スペシャル]として作られる。)민【『중앙일보 96-03 매체』, 중앙일보사, 1996】



また、以下の例では、動作の主体だけではなく、動作の客体までも明示されていない。

(35)a. 그래서 찍혔어?(それで目を付けられたの。)

b. 응, 아무래도 찍힌 것 같아. (うん, やっぱり目を付けられたみたい。)

これは話し手(35a)が前の文脈から聞き手(35b)が上司に目を付けられそうな事実を知っているという状況の下で成立する会話である。これは本稿の見解であるが、現代朝鮮語において一度出現した動作の主体が、それ以降の文脈でそれほど頻繁には出現しない傾向にあることを鑑みれば、このような受動文は書きことば、話しことばを問わず、よく出現するのではないかと考えるのである。現代朝鮮語の受動文において動作の主体が明示されなかったり、動作の主体と動作の客体どちらも出現しなかったりする場合についての詳しい考察は、稿を改めて、取り扱うことにしたい。

また、以下の例では、原因や理由を表す諸状況が動作の主体の代わりに出現している場合もある。

(36) 둘째, 쌀 수입이 개방되면 논 농사의 환경 보호 기능이 파괴된다. (第2に、米の輸入が解放されれば、田んぼ農業の環境保護機能が破壊される。)【『한겨레신문, 칼럼(93)』, 한겨레신문사, 1993】

このような例の詳しい考察も今後の課題としたい。

## 5. 今後の課題

本稿では、現代朝鮮語の受動文において動作の主体がどのような形式で標示されるかを考察し、それらを検証した。남수경(2011:159-181)ですでにそれらの記述はあるものの、本稿では、動作の主体をその動作を成し遂げる人あるいはそれと同等の生き物と規定したり、文末の形式との対応関係を考察したりもしたが、先行研究での記述以上のものを提示することができなかった。ただし、本稿の検証を通じて、動作の主体と動作の客体という単純な二分法では、現代朝鮮語のヴォイスを考察することができないことはわかった。

先にも言及したように、意味論的役割は主観的なものであり、研究者ごとにその数が異なる。Geniušienė(1987:39-40)では、客観的な考察をするために、動作の主体(agent)だけでなく、行為者(actor), 原因(causer), 扇動者(initiator), 経験者(experiencer)をも含む上位の術語として意味論的主体(semantic subject)を提案する。Geniušienė(1987)は受動の研究ではなく、再帰の研究である。これら全ての意味論的役割を受け入れて、現代朝鮮語のヴォイスを考察する必要があるかについての検証は今後の課題である。また、現代

朝鮮語の受動文において動作の主体以外のものがどのような格助詞で標示されるかも今後の課題である。

また、以下に本稿で考察できなかったことを提示することにする。

- ① ヴォイス接尾辞による受動文、疑似接尾辞による受動文、分析的な形による受動文において、動作の主体以外のものがどのように標示されているか。それらは各々の受動文において類似して出現するか、異なって出現するか。
- ② 現代朝鮮語の受動文における動作の主体や動作の主体以外のものが書きことばや話しことばでどのように類似して現れるか、どのように異なって現れるか。

【謝辞】本稿をまとめるにあたり、浜之上幸先生にはご指導、ご鞭撻をいただきました。ここに改めて、感謝の意を表します。ありがとうございました。

#### 註

1) 本稿では、形態論的レベルでの受身形、統辞論的レベルでの受動文、意味論的レベルでの受動を厳密に区別し、議論を進めることにする。

2) 動作の主体と主語どちらにも術語としての subject を使用する研究者もいる。というのも、subject の本来の意味に動作の主体と主語があるからである。Foley & Van Valin (1984) では、動作の主体として actor を、主語として subject を別々の術語を使用している。この点を鑑みても、彼らの研究方法が他の研究と比べても、卓越していると本稿は考える。また、Foley & Van Valin (1984) では、動作の主体に対立する動作の客体 (undergoer)、主語に対立する目的語 (object)、主題に対立する中心 (pivot) を提示している。

3) 本稿では、例文を以下のように示す。

(1) 論文等から引用する場合は、提示する前に言及し、例文末に何の表示もしない。

(2) 作例した用例を示す場合は、例文に作例であることを表示する。

(3) 小説や辞典から用例を引用する場合は、例文末に略字とページを、新聞から用例を引用する場合は、例文末に新聞の略字とその記事の日付そしてその記事が掲載されている面を表示する(インターネット新聞の場合も同じように表示する)。

(4) インターネット上の記事などは例文の末尾にそのアドレスを表示する。

また、以下、本稿で例文を提示する時、その論文などで標示されていない形、動作の主体は \_\_\_\_\_ で、動作の客体 \_\_\_\_\_ で示すことにする(動作の主体や客体などの意味論的役割については、以下の註6と2節で言及することにする)。

4) 本稿では、無標形を動詞のヴォイスを変える何らかの形態を伴っていない形、有標形を動詞のヴォイスを変える何らかの形態を伴っている形と見做し、議論を進めることにする。

5) 現代朝鮮語では、動詞をヴォイス的に派生する形態論的な方法が3つある。‘-이-, -히-, -리-, -기-’ という接尾辞による動詞の派生はそのうちの1つである。現代朝鮮語において動詞をヴォイス的に派生する形態論的方法については、次の3節で言及することにする。



6) 意味論的役割は主観的なものであり、研究者の数だけその数が異なる。例えば、国立国語研究所(1997:8-59)が提示しているように、最小で9つの意味論的役割を設定する研究者がいるかと思えば、最大で32の意味論的役割を設定する研究者もいたりする。国立国語研究所(1997:64-65)では、先行研究で意味論的役割をどのように設定してきたかを概観した後、現代日本語を考察する上で必要な意味論的役割として動作主、経験者、無意志主体、対象、受け手など35の意味論的役割を提示している。

本稿では、現代朝鮮語の受動文を考察する折、多くの意味論的役割の中で動作の主体と動作の客体のみを採用し、議論を進めることにする。

7) 서정수(1996:176)では、主題と対立するものとして主語を提示している。しかしながら、本稿は、談話分析のレベルで規定される主題と統辞論的レベルで規定される主語は同一のレベルで言及することができないとする立場である。それ故、Foley & Van Valin(1984)の議論に従い、主語の代わりに中心を採用し、서정수(1996:176-178)を概観している。

8) 日本語文法学会(2014:324)では、旧情報を聞き手がすでに知っている、あるいは何らかの手掛かりを得ていると推定される情報と規定し、新情報を話し手が、聞き手は知らないとして推定する情報と規定している。

9) 亀井孝・河野六郎・千野栄一(1996:124)では、FSPはfunctional sentence perspective(機能的文展望)の略語で、チェコの言語学者マテジウスが唱導した理論であるとしている。また、ここでは、彼の著作において、陳述文(declarative sentence)には2つの基礎的な要素があり、あるものについて何かが述べられる場合、そのあるものが発話の基礎になり、それを主題(テーマ)というのに対して、これについて述べられる何かがその発話の核になり、それを叙述(レーマ)と呼ばれていることを指摘している。

10) 基本語幹等の現代朝鮮語に関する文法的な術語は、菅野裕臣他編(1991<sup>2</sup>)並びに菅野裕臣(2007<sup>2</sup>)に従うことにする。

11) 菅野裕臣(1982:282)によれば、疑似接尾辞とはその直前に‘는/은(は)’, ‘도(も)’, ‘만(だけ)’のような副助詞を挿入することによって、それ自身自立語のように語幹から分離しうる接尾辞とされている。

12) 菅野裕臣他編(1991<sup>2</sup>:1018)では、分析的な形(analytic form)を補助的な単語を含む2単語以上からなる文法的な形と説明し、それに対立する術語として1単語内の色々な文法的な形(すなわち語幹+接尾辞+語尾)を意味する総合的な形(synthetic form)を提示している。

13) 菅野裕臣他編(1991<sup>2</sup>:1009-1016)では、用言の語幹そのままの形を第I語基、子音語幹で‘-으’を伴う形を第II語基、‘-아/-어’を伴う形を第III語基と呼んでいる。

14) 本稿の調査では、菅野裕臣他編(1991<sup>2</sup>)においてヴォイス接尾辞‘-이-, -히-, -리-, -기-’を取り得る動詞は174個しかない。一方、‘-하다’を‘-되다’に変える、(例えば、‘개발하다(開発する)’【他動詞】と‘개발되다(開発される)’【受身形】)のような疑似接尾辞による動詞の派生は菅野裕臣他編(1991<sup>2</sup>)において639個もある。

15) 本稿では、以下、現代朝鮮語の受動文を考察する過程で、ヴォイス接尾辞によって受身形に派生した述語を含む受動文をヴォイス接尾辞による受動文、疑似接尾辞によって受身形に派生した述語を含む受動文を疑似接尾辞による受動文、分析的な形によって受身形に派生した述語を含

む受動文を分析的な形による受動文として略して、議論を進めることにする。

16) 菅野裕臣(1991<sup>2</sup>:1032-1033)では、自動詞、他動詞、使役形を以下のように規定している。

自動詞…動詞のうち対象を表す格語尾 ‘를/을’ を取り得ないもの

他動詞…動詞のうち対象を表す格語尾 ‘를/을’ を取り得るもの

使役形…他動詞のうち動作の主体が ‘에’, ‘에게’, ‘로/으로 하여금’ 等で表し得るもの

17) 菅野裕臣(1995:237)では、団体名詞を意志動詞を述語とする文の主語(助詞에서による)となる名詞と規定しており、その例として ‘당(党)’, ‘국가(国家)’, ‘학교(学校)’ をあげている。

また菅野裕臣(1991<sup>2</sup>:1040)では、意志動詞を(聞き手に対する命令を表す)命令法、(聞き手に対する勧誘を表す)勧誘法を取りうるものと規定している。

18) 先に示したように、서정수(1996:1057-1058)では、‘진피동문(真の受動文)’ を決定する条件のうちの1つに、ヴォイス接尾辞による受動文は必ず対応する能動文を備えなければならないという条件を提示している。しかしながら、以下に提示する例のように、対応する能動文がないことも十分に考えられ得る。以下の例文は Klaiman(1991:173) から引用しているものである(Klaiman(1991)では、\*という記号をその文が文法的であると認められないことを示すものとして使用している)。

a. \*시간이 나를 쫓고 있어요. (時間が私を追っています。)

b. 나는 시간에 쫓기고 있어요. (私は時間に追われています。)

本稿では、このように対応する能動文があるかどうかを問うことはしないということである。

19) 本稿の調査を通じて、민족문화연구원 용례검색기において ‘파괴당하다(破壊される)’ もわずか 15 例であるが、出現することがわかっている。‘파괴되다(破壊される)’ と ‘파괴당하다(破壊される)’ の間には動作の客体に対する被害の程度の相違があり得ると予想はできるものの、それらがどのように区別され、使用されるかについては、今後の課題としたい。

20) 남수경(2011:150)では、動作の主体が受動文において明示されているかどうかを参考資料として提示している。本稿では、現代朝鮮語の受動文を考察する上で、動作の主体が明示されなくても、文脈から特定できる場合は、その動作の主体が何であるかも考察対象とする必要があると考える。また、本稿では、動作の主体が文脈から特定できない場合でも、辞書などの記述からその動作の主体が何であるかも予め想定して、現代朝鮮語の受動文を考察する必要があると考える。

21) 亀井孝・河野一郎・千野栄一(1996:1373)によれば、与格とは名詞が格変化(曲用)をする言語の、その格(case)の一つで、意味からいうと、概略、日本語の格助詞ニに当たる格であるとされている。

22) 単語結合論はロシアの研究によって展開されている。その理論の核心部分をなす単語結合については、趙義成(1994:2-4)に詳しい説明がある。それを要約すると、次のようになる。

ロシアの文法論は大きく形態論と統辞論に分かれる。その研究対象として前者が単語変化(語形変化)と単語形成(造語)に焦点を当てるのに対して、後者が文と単語結合に焦点を当てる。ロシアでは、文より小さい単位である単語結合までも研究対象としている。単語結合は自立的品詞に属する 2 つの単語またはそれ以上の連結によって構成され、単一であるが、分節できるある概念や表相を表すのに使用される文法的統一体と定義される。この定義から思い浮かべることができる単語結合には ‘万有引力の法則’ のように幾つかの単語からなりながら



も, 1つの概念を表す群名詞だけではなく, ‘本を読む’のような用言のある単語の連結も含まれている。単語結合は, 自らの語彙=文法的特性によって結びつきを予め決定し, 文法的に主だった役割を果たす核心的構成要素と文法的に従属した単語である従属的構成要素からなる。単語結合を形成する折, 単語の結びつきには4つのものがある。それは, (1)単語附加的従位的結びつき, (2)主語と述語の結びつき, (3)動作の主体という意味を持った名詞の具格と過去分詞の結びつき, (4)状況語的意味を表す単語とそれによって規定されるその他の文の成分の結びつきである。

23) 現代朝鮮語には, その動詞のアスペクトを表す形式が2つ存在する。この2つの形式は動詞が自動詞を意味するか, 他動詞を意味するかによって, その伴い方が異なる。つまり, 動詞が自動詞であれば, ‘I-고 있다’ と ‘III 있다’ どちらも伴うことができ, 動詞が他動詞であれば, ‘I-고 있다’ しか伴うことができない。自動詞が ‘I-고 있다’ を伴えば, 動作の進行を表すのに対して, ‘III 있다’ を伴えば, 動作の結果状態を表す。一方, 他動詞が ‘I-고 있다’ を伴えば, 動作のアスペクト的性質によって動作の進行と動作の結果状態どちらも表す場合があり得る。

24) 浜之上幸(1992:49)では, Nedjalkov&Jaxontov(1988:6)を引用し, 状態相を物事のある状態をその起源をまったく含意することなしに表し, 自然な状態を表すことが多いとしている。また, 浜之上幸(1992:98)は, Nedjalkov&Jaxontov(1988:4)を引用し, 自然な状態とは, ひとりでに生じたもので, 動作主(agent)の意志や努力と無関係のものであるとしている。本発表もこの見解に従うことにする。

#### 用例を収集した検索機

민족문화연구원 용례검색기 : <http://db.koreanstudies.re.kr/>(略号민を使用する。)

#### 参考文献

- 강명순 (2007) 『국어의 ‘태’ 연구』 과주: 한국학술정보.  
구본관·박재연·이선웅·이진호·황선엽 (2015) 『한국어 문법 총론 I』 서울: 집문당.  
\_\_\_\_\_ (2016) 『한국어 문법 총론 II』 서울: 집문당.  
국립국어원 (2005) 『외국인을 위한 한국어 문법 2』 서울: 커뮤니케이션북스.  
김홍수 (1998) 「피동과 사동」 『문법 연구와 자료』 서울: 태학사, 621-664.  
남수경 (2011) 『한국어 피동문 연구』 서울: 월인.  
裴禧任 (1988) 『國語被動研究』 서울: 高麗大學校民族文化研究所.  
서울대학교 大學院 國語研究會 編 (1990) 『國語研究 어디까지 왔나』 서울: 東亞出版社.  
서정수 (1996) 『국어문법』 서울: 한양대학교출판원.  
연세대학교 언어정보개발연구원 편 (1998) 『연세 한국어사전』 서울: 두산동아.  
우인혜 (1997) 『우리말 피동 연구』 서울: 한국문화사.  
이상익 (1999) 『국어의 사동·피동구문 연구』 서울: 집문당.  
이정택 (2004) 『현대 국어 피동 연구』 서울: 박이정.  
홍재성 편 (1997) 『현대 한국어 동사 구문 연구』 서울: 두산동아.

- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 (1996)『言語学大辞典 第6巻 [術語編]』東京：三省堂。
- 菅野裕臣 (1982)「朝鮮語(ヴォイス)」『講座日本語学 10』東京：明示書院, 280-291.
- \_\_\_\_\_ (1995)「朝鮮語語彙のクラスをめぐって」『朝鮮文化研究』2 東京：東京大学朝鮮文化研究施設, 229-248.
- \_\_\_\_\_ (2007<sup>2</sup>;1981)『朝鮮語の入門』東京：白水社。
- 菅野裕臣・早川嘉春・志部昭平・浜田耕策・松原孝俊・野間秀樹・塩田今日子・伊藤英人共編 金周源・徐尚揆・浜之上幸 協力 (1991<sup>2</sup>;1988)『コスモス朝和辞典』東京：白水社。
- 国立国語研究所 (1997)『日本語における表層格と深層格の対応関係』東京：三省堂。
- 工藤真由美 (1990)「現代日本語の受動文」『ことばの科学 4』東京：むぎ書房, 47-102.
- \_\_\_\_\_ (1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現』東京：ひつじ書房。
- 小学館・金星出版社共同編集(油谷幸利・門脇誠一・松尾勇・高島淑郎編) (1993)『朝鮮語辞典』東京：小学館。
- 崔昌玉 (2007)『現代朝鮮語のヴォイス接尾辞について—音韻論的, 形態論的, 統辞論的, 意味論的観点を中心に—』千葉大学博士論文(未公刊), 千葉：千葉大学。
- \_\_\_\_\_ (2010)「現代朝鮮語の受動文の類型—'-이-, -히-, -리-, -기-'による派生を中心に—」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』第12号 千葉：千葉大学ユーラシア言語文化論講座, 83-105.
- 趙義成 (1994)「現代朝鮮語の-에서格について」『朝鮮学報』150 天理：朝鮮学会, 19-72.
- \_\_\_\_\_ (1996)「現代朝鮮語の-에格について」『第4回 大阪・アジアスカラシップ 活動報告書』大阪：大阪国際交流センター, 15-24.
- 朝鮮語学研究会 (2015<sup>2</sup>;1987)『朝鮮語を学ぼう』東京：三修社。
- 陳満里子 (1996)「現代朝鮮語の-로格について」『朝鮮学報』160 天理：朝鮮学報, 1-64.
- 仁田義雄・村木新次郎・柴谷方良・矢澤真人 (2000)『文の骨格』東京：岩波書店。
- 日本語文法学会 (2014)『日本語文法事典』東京：大修館書店。
- 浜之上幸 (1992)「現代朝鮮語の「結果相」=状態パーフェクト—動作パーフェクトとの対比を中心に—」『朝鮮学報』142 天理：朝鮮学会, 41-108.
- 浜之上幸 (2016)『現代朝鮮語のアスペクト論』(未公刊)
- 林田理恵 (1996)「ロシア語における「主語」と「主題」そして「主体について」—(1)序論—」『大阪外国語大学論集』16, 大阪：大阪外国語大学, 61-95.
- \_\_\_\_\_ (1999)「ロシア語受動構文の意味と機能」『ロシア・東欧研究』3 大阪：大阪外国語大学, 103-142.
- \_\_\_\_\_ (2000)「ロシア語における「主語」と「主題」そして「主体」について：(3)受動構文(言語編)」『大阪外国語大学論集』22 大阪：大阪外国語大学, 15-53.
- \_\_\_\_\_ (2011)「ロシア語の受け身が描く世界：主語と動作主項をめぐって」『大阪大学世界言語研究センター論集』6 大阪：大阪大学, 37-56.
- 韓南洙 (1979)「現代朝鮮語における格助詞-에게について」『言語の研究』東京：むぎ書房, 547-596.



- Baker, M. (2015) *Case*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Blake, B.J. (2001) *Case 2<sup>nd</sup> edition*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Bondarko, A. V. (1975) "On Field Theory in Grammar-Diathesis and its field-", *Linguistics-an international review*- 157: 43-65.
- \_\_\_\_\_ (1991) *Functional Grammar: A Field Approach*, New York: John Benjamins.
- Comrie, B. and M. Polinsky (eds) (1993) *Causatives and Transitivity*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Foley, W. B. and R. D. Van Valin (1984) *Functional Syntax and Universal grammar*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Geniusiené, É.S. (1987) *The Typology of Reflexives*, Berlin, New York, Amsterdam: Mouton de Gruyter.
- Jespersen, O. (1924) *Philosophy of Grammar*, London: George Allen and Unwin.
- Klaiman, M.H. (1991) *Grammatical Voice*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Kiefer, F. (ed.) (1973) *Trends in Soviet Theoretical Linguistics*, Dordrecht, Boston: D. reidel publishing company.
- Kulikov, L. (ed.) (1998) *Typology of Verbal Categories*, Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Lyngfelt, B. and T. Solstad (2006) *Demoting the Agent*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Nedjalkov, V.P. (ed.) (1988) *Typology of Resultative Constructions*, Amsterdam: John Benjamins.
- Nedjalkov, V.P. and S.J. Jaxontov (1988) "The typology of resultative constructions", In V.P. Nedjalkov (ed.) (1988), 3-62.
- Nedjalkov, V.P. and V.P. Litvinov (1995) "The St Petersburg/Leningrad Typology Group", In Shibatani, M. and T. Bynon (eds) (1995), 215-271.
- Palmer, F.R. (1994) *Grammatical roles and relations*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Shibatani, M. (1988) *Passive and voice*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- \_\_\_\_\_ (1988) "Voice in Philippine languages", In M. Shibatani (1988), 85-142.
- Shibatani, M. and T. Bynon (eds) (1995) *Approaches to Language Typology*, Oxford: Oxford University Press.
- Svartvik, J. (1966) *On Voice in the English Verb*, The Hague: Mouton.
- Trask, R. L. (1993) *A Dictionary of Grammatical Terms in Linguistics*, London and New York: Routledge.

## 현대한국어의 피동문에서 동작의 주체가 어떻게 명시될까?

최창욱  
마쓰야마 대학

본고의 목적은 현대한국어의 피동문에서 동작의 주체(actor)가 명시될 경우에 초점을 맞추어서 그런 경우 동작의 주체가 어떤 격조사를 수반하는지를 고찰해서 선행연구의 기술과 비교, 검토하는 데 있다. 본고의 구성은 다음과 같다. 먼저 동작의 주체와 주어(subject) 그리고 주제(topic)를 정리한다. 그 술어들을 정리할 이유는 선행연구에서 엄밀하게 구별하지 않고 논의해 왔기 때문이다. 그 다음은 본고의 구체적인 고찰과 검토이다. 마지막으로 본고에서 기술할 수 없었던 과제 몇 개를 제시한다.

남수경(2011:159-181)에서는 현대한국어의 피동문에 있어서 동작의 주체가 어떤 격조사를 수반하는지를 언급하고 기술한 바가 있다. 본고에서는 그 연구와 달리 의미역(semantic role)을 동작의 주체와 객체로 단순하게 이분화시킴으로써 논의를 전개한다. 그리고 단체명사와 상태상(stative)을 도입해서 남수경(2011:159-181)에서 언급하지 않았던 내용을 기술할 수 있게 되었다.

본고에서는 동작의 주체를 사람이나 사람과 같은 생물이라고 간주한다.

본고의 고찰을 통하여 현대한국어의 피동문에서 동작의 주체는 (1) ‘에게/한테’, ‘께’ (2) ‘에게서/한테서’ (3) ‘로부터/으로부터’ (4) ‘에 의하여/에 의해서’, ‘를/을 통하여/통해서’ 를 수반하는 것이 밝혀졌다. 더 나아가서 (5) 동작의 주체자체를 아예 명시하지 않는 방법이 있는 것도 다시 확인할 수 있게 되었다.

Jespersen(1924)에서 언급한 바가 있지만 피동문의 연구에서 동작의 주체는 그렇게 중요시해서 피동문을 연구해 오지 않았다. 왜냐하면 피동문에서 동작의 주체를 삭제하거나 아예 명시하지 않기 때문이다. 현대한국어의 피동문에서 동작의 주체가 어떻게 명시하는지를 고찰해서 선행연구의 기술과 비교, 검토하는 것이 현대한국어의 피동을 체계적으로 기술하는 데에 상당히 도움이 될 것이라고 본고는 믿는다.